永森 正仁

入門中

『哲学入門』
ヤスパース著、草薙正夫訳／新潮社

本書はたとえ平易に書かれた入門書であるとはいえ、その中に語られた思想は著者の多年にわたる思索の結晶であり、エッセンスである。その意味で本書は特に読書が自己の生活の内的経験を呼びさましつつ、著者とともに考え、ともに哲学することによって、はじめてその価値を生むものであることを忘れてはならない。　【解説】（本書271ページ）

上記は、紹介させて頂く本書、ヤスパースの『哲学入門』の訳者、草薙正夫先生の解説の抜粋です。著者のカール・ヤスパース（1883年～1969年）は、20世紀ドイツの精神病理学者であり哲学者です。世界が冷戦に向かい、東西の陣営が核武装競争を深刻化させていた時代、原子力の平和的利用と対話・交わりのために行動した政治評論家でもあります。

わたしが本書に最初に出会ったのは、工業高校から高専へ編入した頃でした。何かのついでに立ち寄った書店の特設コーナーに、地元香川県出身の著書や訳書が並べられていました。そこに、草薙正夫先生の訳された、ヤスパースの「哲学入門」を見つけたのです。当時「ふむふむ、若人たるもの哲学のひとつも知らなくては」とか思ったのでしょう。薄い文庫本であったこともあり、その本を手に取りました。わたしは、よく小説を選ぶときに巻末のあとがきを読みます。この本の巻末には、草薙先生の解説がありました。解説によるとこの本は、バーゼルで市民向けに12回の講義にわけて行われた、ラジオ講演の全訳とありました。（バーゼルはスイスの北西の都市です。ドイツとフランス、そしてスイスの三国の国境に隣接しています。ヤスパースは晩年をここで過ごし、この市民墓地に眠っています）そして、現代の世界哲学界の最高峰を占めた大家の手になる優れた哲学への入門書である、と記されてありました。「この本なら僕にも読めるかも。毎日、ひとつの講義を読めば、二週間足らずで哲学を知ることができる。なにより薄い（1講義20ページくらい）。」このような気持ちで本書の購入を決めました。

科学が自己の領域において、いなみがたく確実で、一般的に承認されるいろいろな知識を獲得しているのに反して、哲学は数千年の間の努力に

もかかわらず、かつてこのような知識に到達したことがないのです。（中略）なるほど完全な哲学は科学と結合しており、またそれぞれの時代において到達された最高の状態にあり科学を前提とするものではありますが、しかし哲学の意味はそれとは異なったある別の根源をもっております。哲学はあらゆる科学に先立って、人間が目覚める場合に現れるのであります。　【第一講　哲学とは何ぞや】（本書８、９ページ）

一日目にして挫折しました。

。。。実は、本書をはじめて本気で読んだのは、最初に購入してから約10年後、大学で情報リテラシー関連の講義を担当させて頂くことになった頃なのです。今は、社会基盤のひとつといわれるインターネット、その原型とされる分散型コンピュータネットワークは、1969年にアメリカ国防総省が出資して構築されたARPANET（アーパネット）が最初と言われています。このネットワークは当時の冷戦時代を反映して、核攻撃下でも司令部と前線の情報が分断されない分散型の情報交換網として開発されました。みなさんが日常的にお使いの、Inter（相互）net（ネットワーク）は、最初は戦争のツールとして開発されたのですね。このようなことを、講義資料に起こしておりましたとき、あ、1969年って、ヤスパースが亡くなった年と一緒だなーと、なにか不思議な符合のようなものを感じたのです。

核兵器を用いた戦争を想定したツールとして、ネットワークが産声を上げた年。原子力の平和利用を訴え、対話と交わりの重要性を訴えたヤスパースの没年。そして今、インターネットというツールを包括し、技術として、また、概念や知識として発展しつづけている、まさに対話と交わり、コミュニケーションのツールを生みうる情報通信技術 ICT（Information and Communication Technology）。ああ、なにか不思議だなー。「哲学は数千年の間の努力にもかかわらず、かつて科学のような知識に到達したことがない」とヤスパースは言っていたけど、コミュニケーションや共感、そしてそのツールの開発にわたしたちは努力し続けているのかな。と、このようなことを考えました（少し脱線ですが、１万５千年前に始まった農耕の始まりにおいて、主食として食することができる麦を人類が得るまでに、

約千年の期間がかかったそうです。なぜ千年もの間、主食となりえない麦を継続して育てたかというと、その目的が、日常的な主食とするためではなく、祭事での特別なご馳走：お酒として用いることであったとの学説があります。この祭事の目的は、他集団との交わりであり、ご馳走である麦は、他集団（他者）と共感するための（分かち合う）ためのツールであったとする一説です：閑話休題)。そして、もう一度、ヤスパースの『哲学入門』を購入、再入門を試みた次第です。

最後に、本書には、ヤスパース自身によって付録、「はじめて哲学を学ぶ人のために」が付けられています。

> 「哲学すること」において問題となることは、現実の生活において顕（あらわ）になるところの無制約的なもの、本来的なものであります。人間としての人間はすべて哲学するのであります。しかしこの意味を一貫した思想としてとらえることは、けっして手っ取り早くは行われないのです。体系的な哲学的思想は研究を必要とします。このような研究は三つの道を自己のうちに含んでいます。
>
> 【哲学の研究について】（本書218ページ）

ヤスパースは上記の三つの道を、次のように示しています。１）科学的研究への参加、２）先人に関する研究、３）日常の良心的な生活態度。そして、この三つの道のどれか一つが欠けても、明晰なそして真実の「哲学すること」に到達することはできないと記しています。さらに、特にすべての若い人びとにとって、どのような形態において、これらの道を進んだらよいかということが問題であることを説明しています。

ああ、まさに、わたくしも入門中であります。

執筆者紹介

永森　正仁

情報・経営システム工学専攻助教。専門領域は、情報システム工学、教育工学、福祉工学。

『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格

『哲学入門』ヤスパース著 草薙正夫訳 新潮社（新潮文庫）1954年 529円

ブックガイド目次へ